

つくば次世代型スキル育成をめざす社会科学学習指導の在り方
～課題の工夫と ICT 活用によるアクティブラーニングの具体化を通して～

教諭 大山 喜裕

1 主題設定の理由

我が国は、絶え間ない技術革新によって著しい情報化や国際化が進んでいく変化の時代に直面している。文部科学省は、「我が国の将来を担う子ども達には、変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を身につけること」の重要性を指摘し、中教審は、平成 26 年 11 月の答申で、そのような資質を育成する方法として、「アクティブラーニング」を打ち出し、その有効性について言及した。

つくば市では、これに先立つ形で、小中一貫の連続性のある学びを通して、変化する社会をよりよく生きるための「つくば次世代型スキル」を育成する「つくばスタイル科」を特設し、先進的な教育活動を全国に先駆けて展開してきた。

また、AZUMA 学園では、「つくば次世代型スキル」を育成していくことは、社会的な要請を背景としている以上、「つくばスタイル科」だけに課された使命ではなく、教育活動全体にとっての課題であると捉え、「次世代型 AZUMA プラン」を策定し、小中一貫の連続した学びを通して教科領域横断的に「つくば次世代型スキル」を育成することを目指し実践を積み重ねてきた。特に社会科では、客観的な根拠に基づいて意見文を作成していく活動を通して育む「言語力」に重点を置いて実践を積み重ねてきている。

ところが、本学園 6 学年の児童*名を対象に社会科の時間に行ったアンケート（H*、*、*実施）を見てみると、「客観的な根拠に基づいて作成された意見文」を「よい」と評価した児童は*%程度となった。「つくば次世代型スキル」を育成することは、本学園社会科において緊急の課題であると言えよう。

そこで本研究では、冒頭で触れたアクティブラーニングの授業方法論に着目し、課題の工夫と、ICT の活用を手がかりにして、社会科におけるアクティブラーニングの具体化を行っていく。そして具体化されたアクティブラーニングの実践を通して、「つくば次世代型スキル」の育成をめざす社会科学学習指導の在り方を明らかにしていく。

2 研究のねらい

課題の工夫と ICT 活用によるアクティブラーニングの具体化を通して、つくば次世代型スキルを育成する社会科学学習指導の在り方を明らかにする。

3 研究の仮説

- (1) 課題の工夫によって主体的な学びと協働的な学びを促し、アクティブラーニングを具体化したものを社会科学学習に組み込んで実践すれば、つくば次世代型スキルを育成できるであろう。
- (2) ICT 活用によって協働的な学びを促し、アクティブラーニングを具体化したものを社会科学学習に組み込んで実践すれば、つくば次世代型スキルを育成できるであろう。

「とで育成できるものである」と考えられる。

(3) 課題の工夫と ICT 活用によるアクティブラーニングの具体化について

平成 26 年 11 月の中教審答申において『主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）』の必要性が指摘された。アクティブラーニング実現の鍵は、主体的・協働的な学びの実現にあることがわかる。そこで、本研究では、課題の工夫、ICT 活用に着目し、アクティブラーニングの具体化を図っていく。なぜなら、課題の工夫と ICT の活用は、社会科における主体的・協働的な学びの実現において中核となるものであると考えられるからである。

ア 課題の工夫

主体的、かつ協働的な学びを実現するため、児童にとって問題意識が喚起され、かつ、意見交流が促される課題を設定していく。そこで、以下の工夫を行う。

第一に、児童にとって既習事項や常識を揺さぶられる内容を選定し、「なぜ？」という課題意識が生まれる課題を立てる。これにより、児童の驚きが喚起され、主体的な学びが展開されると考えられる。第二に、価値判断を要する内容を選定し、意見交流を前提とした課題を立てる。「どうすべきか？」や「どちらがよいと考えるか？」などを課題とし、一問一答型の授業からの脱却を図る。

イ ICT の活用

ICT 機器・スタディネットを活用していく。スタディネットは、諸学力を高める効果がある協働的な学びを実現する学習支援システム「タブレット学習システム」と呼ばれるものである。これは、タブレットと大型スクリーンによる学習システムであり、児童が一人一台のタブレットで直感的に操作、表現したものを双方向で吟味していくことができる学習システムである。

5 研究の実際

(1) 主題にせまるために

ア 児童の実態について

本校の児童が、「客観的な根拠に基づいて意見を構成し、伝え合い、自分や集団の意見を発展させていく力」を身につけているか、本学園 6 学年の児童 114 名を対象に実態調査を行った。これを見ると、「客観的な根拠に基づいて作成された意見文」を「よい」と評価した児童は*%程度であり、児童の判断は、「好き嫌い」等、直感的な経験知に基づくものであることがわかる。

表 2 1 組の実態調査とその結果

アンケート調査（5月21日実施 1組 男13人 女16人 計29人）	
意見文「8月最終週から学校開始に賛成？反対？」	
A 反対です。夏休みは、短くするべきではないと思います。なぜなら、休みの日は楽しいし、家族や友達といろいろ遊べるし、普段できない楽しいことにも挑戦できるようになるからです。そもそも、日本の夏はとても暑くて勉強に集中できないし、勉強に集中できなければ、成績も悪くなってしまうからです。	1 どちらが、よい意見文だと思いますか。 A *人 B *人 わからない *人
B 賛成です。夏休みは、短くしてもよいと思います。なぜなら、現在、公立小中学校の冷房の設置率は 29.9%（文科省調べ）で、前回の調査よりも 11%も上がっています。現在吾妻小でも冷房の設置が進んでいます。このままいけば次回の調査でも設置率は上がるでしょう。冷房のある部屋で学習できるならば、短くしてもよいと思います。実際に冷房の効いた塾は夏休みもやっているのですから。	2 なぜ、そのように考えたのですか。 A 記述内容の肯定 *人 ・書いてある理由がたくさんあるから。など A 好き嫌い *人 ・短くなるのは嫌だから。など B 記述内容の客観性 *人 ・はっきりとした数字がでているから。 ・文部科学省の調査にもとづいているから。など B 資料の活用 *人 ・グラフが出されていた。など

イ 課題を工夫していくために

既習事項や常識を揺さぶられる内容を選定するにあたっては、既存のカリキュラムに位置づけることができる内容を考慮することはもちろん、より児童の意欲が高まるように、時間的・空間的に児童にかかわりの深い内容を選定していく。具体的には、災害時緊急避難先に指定され、実際に避難所となった吾妻小学校に関わりの深い「防災」を扱っていく。また、「避難者は親切にされるだろう」という、児童の思い込みに「避難者はおもてなしを受けることが前提ではない」という点から揺さぶりをかけ、「なぜ？」という課題を立てさせる。これにより、主体的な学びを展開していく。

また、実際に災害が発生した避難所の判断場面を選定し、「賛成・反対、どちらがよいと考えるか？」という課題を設定していく。

ウ ICT を活用していくために

本研究では、以下の三つの機能に焦点を絞り活用していく。

第一に、エクスチェンジボード機能による全員の意見表明および、集約である。これは、エクスチェンジボード、タッチアナライザーを活用すると、大型スクリーンへの全員の意見集約、提示が非常に簡単に行うことができるというものである。詳しく述べるならば、前者は児童の記述を、後者は児童の選択肢を集約できるものである。これにより、一人一人の学習への参加意欲が喚起され、主体的な取り組みが促され则认为。第二に、エクスチェンジボード機能による意見の吟味である。エクスチェンジボードで抽出した一人の意見を全員に配信することで、多面的・多角的な分析が可能になり、児童間での深い意見の吟味を行うことができる。このような、意見吟味の場面をしっかりと保証していくことで、協働的な学びが見込まれ、次世代型スキルを効果的に育成していくことができると考える。第三に、授業履歴機能による児童の回答の記録である。授業で児童が作成した文章、作品をエクセルデータとして保存することができるため、これにより、ワークシートの収集などの時間的コストを大幅に削減することができる则认为。

(2) 単元

小学校社会科公民的分野「わたしたちの生活と政治」

特設小単元「AZUMA 防災レンジャー！」

(3) 単元の目標

ア 防災を事例として、地方公共団体の政治の働きに関心をもち、意欲的に調べようとしている。
(社会的事象への関心・意欲・態度)

イ 防災を事例として、地方公共団体の政治の働きについて、見学や調査活動、話し合いを通して、自分の考えをまとめることができる。

(社会的な思考・判断・表現)

ウ 防災を事例として、地方公共団体の政治の働きについて、専門家を招いたり、各種資料を活用したりして、必要な情報を集め、読み取っている。

(観察・資料活用 of 技能)

エ 防災を事例として、地方公共団体は、国民生活の安定を図るために大切な働きをしていることを理解している。
(社会的事象についての知識・理解)

(4) 単元の指導について

防災教育に関する理論的な研究は数多く、また、多くの学校で実践的な研究もなされている。その多くは、家屋の損壊等の「発生した危険」に対応し「自分で判断し、行動（避難）する子」を育成するものである。例えば、身の護り方や、回避行動の取り方、家族との連絡方法、物資の備蓄方法、食料の確保などである。これらは、危険予測・回避能力に関する避難者一人一人の「自助」の涵養が目的になっている。本研究で実施した防災キャンプもこの流れに位置づくといえよう。

一方、避難者や避難所には具体的にどのような集団的判断が求められるのか、つまり「共助」「公助」に関しては、助け合いや思いやりといった道徳的な価値の重要性は確認されるが、具体的な助け合いの場面や状況をふまえた「判断」を想定した授業実践は少ない。したがって、本単元において、避難者や避難所の「判断」について学習することは、防災教育をより現実的かつ、具体的にしていく上でも意義があると同時に、「客観的な根拠に基づいて意見を構成し、伝え合い、自分や集団の意見を発展させていく力」を育成していく上でも意義があると考えられる。特に、「避難所は、家屋の倒壊がないならば避難者の受け入れを拒否することもあること」や「避難者はお客様ではないので組織的に避難所の運営に関わってもらいたいということ」

「避難者の実態に応じて対応をしていくものであること」などの点については、避難者の側からすれば、一見不親切と取られかねないものである。しかし、避難所の円滑な運営を考えた場合、非常に合理的な側面をもっているのである。このことについて問題解決的に学んでいくことは、本研究の中核をなす「課題の工夫」という観点からも有意義であると考えられる。

(5) 単元計画（18 時間取扱い）

ア 第 1 次 震災復興の願いを実現する政治…………… 3 時間

※ 特設小単元「AZUMA 防災レンジャー！」（本単元）…………… 5 時間

イ 第 2 次 国の政治のしくみ…………… 4 時間

ウ 第 3 次 わたしたちのくらしと日本国憲法…………… 4 時間

(6) 単元略案（5 時間）

時	学習内容	主な問い	児童の活動	資料
1	・ 振り返り ・ 避難所の判断	・ 震災後の吾妻小学校は、広域避難所として機能することになりました。その活動はどのようなものだったのだろう。 例 トイレを貸し出した。 寝泊りできる場所として機能した。 ・ 次の状況において自分だったらどうする？ 例① 燃料をどう使うか？ 燃料を一晩中使うことに賛成？反対？ A グループ 80 代の高齢者含む部屋名簿 B グループ 30 代の健康な人の部屋名簿	・ 東日本大震災後の小学校における避難所としての活動を振り返る。 ・ 例①のような判断を求められる場面について、既習事項や自分の経験から意見を構成する。 ・ 賛成：高齢者や赤ちゃんがいるのだからつけておいた方がよい。夜に消したりつけたり大変だからつけておいた方がよい。 ・ 反対：つけたり消したりして節約して使えばよい。 ・ 反対：避難生活は 1 日ではないのだからつかわない方がよい。	(1) (2)

	・話し合い	・意見を確認しよう。 ・どうして判断が分かれたのだろうか？	・スタディネットで見解の共通点や相違点を確認し、質問や反論をする。 ・判断が分かれた理由を確認する。 ・「弱者を助ける」社会正義の観点を確認する。	
2	・避難所の判断 ・意見文の作成	・次の状況において自分だったらどうする？ 例② 食料をどのように配るか？ 先生が食料を部屋に配ることに賛成？反対？ ※ 『「避難者がお客様として権利を主張する状況」を生み出すような受け入れ体制』である「先生が配り歩く」意見を示す。 ・食料をどのように配るか？根拠を明らかにして意見文を書きましょう。	・例②のような判断を求められる場面について、既習事項や自分の経験、自分で手に入れた資料等から意見を構成する。 ・賛成：学校の間取りや道具など、学校のことは先生が詳しいのだから、先生が配る方がよい。 ・反対：先生だけでは手が足りないから手伝うほうがよい。 ・意見文を作成する。 ・スタディネットに意見を集約する。	(1) (3)
3	・意見文の作成 ・意見文の共有	・食料をどのように配るか？根拠を明らかにして意見文を書きましょう。 先生が食料を部屋に配ることに賛成？反対？ ・食料をどのように配るか？根拠を明らかにして意見文を発表しましょう。	・例②のような判断を求められる場面について、既習事項や自分の経験、自分で手に入れた資料等から意見を構成し、発表する。 ・賛成：学校の間取りや道具など、学校のことは先生が詳しいのだから、先生が配る方がよい。 ・反対：先生だけでは手が足りないから手伝うほうがよい。 ・スタディネットで見解の共通点や相違点を確認し、質問や反論をする。	(1) (3) (4)
	・意見の提案 ・意見の評価	・専門家に提案してみよう。 ・専門家に評価してもらおう。	・理由を明らかにしながら、意見文を提案する。 ① 先生が配ることに賛成！ ② 先生が配ることに反対！ ・評価を聞くことで、②の方法がよりよいことを確認する。	(1) (3) (4)
④	MQ. (校内を把握している「先生」が配った方が、速やかに配れるはずなのに) (しかも、先生は「全体の奉仕者」として働く義務があるはずなのに) 先生が配ることが、なぜ問題なのだろうか？			
		・ヒントとなる事例の資料はあるのですか。	・要望が殺到し、円滑な指揮系統が保てなくなってしまう事例をしめす資料を読む。 ・お客様になってしまうことの危険性を確認する。	
	MA. 避難者を「お客様」状態にしないことが重要なのに、避難者を活用せず、「お客様」状態にしているから。			

	・避難所としてふさわしい判断	・避難所としての判断で大事なポイントは何ですか。 ・今回の事例以外にもお話を聞いてみましょう。	・弱者に配慮し、お互い様の精神で、みんなで解決していくことが重要であるということを理解する。 (「避難者はお客様ではない」という避難者に求められる心得と、「避難者をお客様にしない」受け入れ側に求められる心得を確認する。) ・専門家の先生と質疑応答などをし、メモをとる。 ・スタディネットで見解の共通点や相違点を確認し、質問や反論をする。
※	・防災キャンプ	防災キャンプをしよう！ ・テント設営 ・サバイバル飯炊き ・テント泊	・夏季休業日中に実施される防災キャンプでの、テント設営、サバイバル飯炊き、テント泊等の耐乏体験を通して、自ら判断し協力しながら行動することの大切さについて学習する。
5	・まとめプレゼンテーション	・学習したことを発信しよう。 5分のプレゼンテーションにまとめよう。	・スタディネットに保存されている意見を参考にしながらまとめる。 ・学習内容をプレゼンテーションにまとめてつくば市のプレゼンテーションコンテストに応募する。
N	・まとめプレゼンテーション	・練習しよう。 ・撮影しよう。	・休み時間や国語の時間などを活用してプレゼンテーションの練習を進める。 ・休み時間などを活用してプレゼンテーションの撮影をする。

(1)防災教科書(吾妻小防災大辞典より作成) (2)模擬避難者名簿 (3)ワークシート (4)資料(学校防災最前線より作成)

(7) 指導の結果と考察

ア アンケート調査の比較から

「客観的な根拠に基づいて意見を構成し、伝え合い、自分や集団の意見を発展させていく力」を身につけているか、実践後に6学年*組の児童*名を対象に実態調査を行った。表3は、その結果である。

表3 実態調査とその結果

アンケート調査(*月*日実施 男*人 女*人 計*人) 意見文「8月最終週から学校開始に賛成?反対?」 A 反対です。夏休みは、短くするべきではないと思います。なぜなら、休みの日は楽しいし、家族や友達といろいろな遊べるし、普段できない楽しいことにも挑戦できるようになるからです。そもそも、日本の夏はとても暑くて勉強に集中できないし、勉強に集中できなければ、成績も悪くなってしまうからです。 B 賛成です。夏休みは、短くしてもよいと思います。なぜなら、現在、公立小中学校の冷房の設置率は29.9%(文科省調べ)で、前回の調査よりも11%も上がっています。現在吾妻小でも冷房の設置が進んでいます。このままいけば次回の調査でも設置率は上がるでしょう。冷房のある部屋で学習できるならば、短くしてもよいと思います。実際に冷房の効いた塾は夏休みもやっているのですから。	1 どちらがよい意見文だと思いますか。 A *人 B *人 わからない *人 2 なぜ、そのように考えたのですか。 A 好き嫌い *人 ・短くなるのは嫌だから。など B 記述内容の客観性 *人 ・はっきりとした数字がでているから。 ・文部科学省の調査にもとづいているから。など B 資料の活用 *人 ・グラフが出されていてわかりやすかった。など
--	--

これを見てみると、「客観的な根拠に基づいて作成された意見文」を「よい」と評価した児童が*%以上となった。事前調査では、*組児童は*%であったことと比較すると、大きく認識が向上したと考えられる。

以上より、本実践の結果、客観的な根拠に基づいた意見に対して評価することができるようになったと考えられる。

イ 質的分析

学習のまとめとして児童が作成したプレゼンテーションの台本の内容分析と、授業の様子、感想文等を分析していくことで、課題の工夫と ICT 活用によって主体的な学び、協働的な学びが促されたか、また、「客観的な根拠に基づいて意見を構成し、伝え合い、自分や集団の意見を発展させていく力」が身についたかについて、検討していく。

(ア) 感想文より

本実践における児童の感想を見ると、「燃料のほうが大事だと思ったけど、反対意見を聞いてびっくりした。(児童*)」「お客様にならないというのが驚いた(児童*)」「受け入れてもらえないなんて助けてもらえるとと思ったのにショックだった。なぜなのか気になって、わかった時にはすっきりした。(児童*)」などの意見が見られ、大変意欲的に授業に取り組んでいた。特に児童*は、社会科に苦手意識を持っていたが、本単元では継続して熱心に取り組むことができた。

以上より、揺さぶりをかける課題の工夫によって、主体的な学びが促されたと考えられる。

(イ) 児童の活動の様子より

大画面で簡単に操作できるシステムにより、教師だけではなく児童も即座に意見を確認し、授業・議論を進める場面が生まれた。例えば、児童が「児童*の作品が見たいです。」などと申し出て、意見を確認していく場面である。また、記述が不十分な児童のところに行って説明をして教えあう姿も見られた。課題の工夫によって話し合いが促進されただけでなく、ICT の活用によって、児童主体の話し合いが活性化されたと考えられる。



図2 児童が確認の様子

以上より、課題の工夫と ICT 活用によって意見の交流が促進され、協働的な学びが促されたと考えられる。

(ウ) プレゼンテーションの様子より

最終的に児童は、防災研究所の方からの資料をもとに、山田南小学校での事例を具体的な根拠として示しながらプレゼンテーションを作成した。児童は、思いつきではなく、出典の明らかな客観的な根拠を集めながら活動していた。

以上より、課題の工夫と ICT 活用によって意見の交流が促進され、協働的な学びが促された結果、「客観的な根拠に基づいて意見を構成」する力が育成されたと考えられる。



図3 児童が発表の様子

(エ) 教師の関わりより

本研究では、ICT 機器によって集約された児童の記述をもとにその都度、指導を次の二つの視点で行っていった。第一に、「個別支援型」である。これは、つまづいている児童に対して助言したり、助言するよう他の児童に声をかけたりするものである。第二に、「個別揺さぶり型」である。これは、ある児童の意見と反対の主張とその根拠を示していくことを促すものである。例えば、「もしお年寄りがいたら?」「それでもストーブは消しますか?」などである。これも ICT を活用することで、より迅速に、かつ全体を視野に入れて実施できた。

以上より、ICT 活用によって意見交流、協働的な学びが促されたと考えられる。

イ 数量的分析

児童の記述の変容から形成的評価によって児童の到達度・達成度を分析していくことで、本研究の課題の工夫と ICT 活用が有効であったか分析していく。具体的には、1 時間目と 4 時間目の授業の際の記述の比較を行ったものである。

(ア) 到達度評価

ループリックを用いて児童の解答の到達度を質的に段階化し、その調査内容を数量化していく。児童がどこまで高い段階に到達したかを分析していく。用いたループリックおよび、各段階の児童の人数を示したものが表 4 である。

表 4 ループリックと到達度評価

段階	・評価基準	人数変化（事前→事後）
0	・理由を示していない。 ・理由を示しているが、好き嫌いや感情が理由になっている。	*名→*名
1	・理由を 1 つ示している。 ・好き嫌いや感情を理由としていない。	*名→*名
2	・理由を 2 つ示している。 もしくは、理由を 1 つ示し反対意見への反論を示している。 ・好き嫌いや感情を理由としていない。	*名→*名
3	・理由を 2 つ示している。 ・反対意見への反論を示している。 ・客観的な情報を根拠にしている。	*名→*名

（筆者作成）

表 2 の結果からは、次のことがわかる。段階 3 に到達している児童が *% 以上にのぼっている。多くの児童が高い段階に到達していることが伺える。一方、段階 1 に到達するに留まった児童が見られることから、今後も継続的に指導をしていく必要があると言える。なお、段階 3 の「客観的な情報」は、本研究においては単元の後半にある専門家から頂く形になった。

以上より、課題の工夫と ICT 活用によってアクティブラーニングを具体化した社会科学習指導は、有効に作用したと見ることができる。

(イ) 達成度評価

児童一人一人の到達度の比較から達成度を「深化」「維持」「後退」に分類し、児童の認識がどのように変容したか質的な変化を数量化して分析を行っていく。

「深化」とは、1 時間目の記述に比べ、4 時間目の認識のレベルが上がっていることを意味する。「維持」とは、1 時間目と 4 時間目の認識のレベルの変化がなかったことを意味する。「後退」とは、1 時間目の記述に比べ、4 時間目の記述のレベルが下がっていることを意味する。

表 5 到達度の変化と達成度評価

達成度	到達度の変化と人数						人数合計		
後退	1→0	*名					*名		
	2→0	*名	2→1	*名					
	3→0	*名	3→1	*名	3→2	*名			
維持	0→0	*名	1→1	*名	2→2	*名	3→3	*名	*名
深化	0→1	*名	0→2	*名	0→3	*名		*名	
	1→2	*名	1→3	*名					
	2→3	*名							

※太字は 2 段階以上の深化が見られた児童数。（筆者作成）

表 5 は達成度評価を示したものである。達成度評価から次のことがわかる。

「後退」した児童も * 名見られるが、 * %以上の児童が「維持」「深化」している。「維持」した児童の多くは最高段階である段階 3 であったことを考えると、高い段階の児童はそのままに、中低度の段階の児童が引き上げられたこと、つまり児童の学習の底上げがなされたことを意味する。特に、段階 0 の児童は、2 段階以上の深化をした。

以上より、課題の工夫と ICT 活用によってアクティブラーニングを具体化した社会科学学習指導は、有効に作用したと見ることができる。

6 実践の成果と課題

(1) 成果

課題の工夫によって、意欲的に学習に参加する児童の姿が見られた。また、「なぜ？」という問題意識から、児童同士が意見を交流していく姿も見られた。また、ICT の活用によって、機器を介して意見交流していく児童の姿が見られた。これは、主体的な学びと協働的な学びが促され、アクティブラーニングが具体化できたものであると考える。

さらに児童は、以上のような学びの結果、本研究において育成を目指す「つくば次世代型スキル」を伸ばすことができた。

以上より、つくば次世代型スキルの育成を目指す社会科学学習指導の在り方を示すことができたと考える。

(2) 課題

1 時間目の授業の学習形態として、ジグソー法を取り入れ実践した。一方のグループには避難者名簿にお年寄りや赤ちゃんを入れ、一方には入れずに、それぞれ避難方略を考えるとというものである。その結果、その後の意見の対立が鋭くなり、活動が活性化した。学習形態がもたらした学習効果については本研究では深く検証していない。今後は、学習形態と課題の関係についても実践を通して深めていきたい。また、低い段階にとどまった児童が若干名いたことから、今後も継続して研究を改善していく。

< 主要参考文献 >

- ・茨城県教育委員会『平成 27 年度学校教育指導方針』茨城県教育センター，2015 年。
- ・唐木清志『日本型サービスマーケティングの構想』東洋館出版社，2008 年。
- ・つくば市教育委員会『平成 27 年度学校教育指導方針』教育委員会教育指導課，2015 年。
- ・つくば市総合教育研究所編著『つくば市小中一貫教育成功の秘訣 アクティブラーニング「つくばスタイル科」による 21 世紀型スキルの学び』東京書籍，2015 年。
- ・森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書，1984 年。